

壺井戸と地蔵尊



子供の頃この地蔵さんの近くに家族ぐるみで付き合っていた大工の棟梁が居られました。その棟梁おじいちゃんは、「ボン、この地蔵さんのそばには寄らないように、怖い地蔵さんやからな」とか「この地蔵さんをなぶって若死にした」「動かして身内に不幸が続いた」とか、何回も聞かされたことがありました。とどのつまりは「わしはこの地蔵さんのことで頼まれても絶対に仕事なんかはしない。」とうそぶいていました。そんなこんなで近くを通っても、素知らぬ顔で見もせずに通り過ぎていました。

時は過ぎ、いまから10年ほど前になりますか、ある日、そばを通り過ぎようとした瞬間、あれ！この場所確か大きな家があったのがなくなっている、そしてガレージになっている。あれあれ地蔵さんもきれいな塀に囲まれている。あれ！こんな感じだったのかな！そうです！地蔵さんの周りの状況ががらりと変わっていたのです。地蔵さんの在った場所に近寄ってみると何やら説明文らしき真新しい駒札が建っており、読んでみますと地蔵さんのことではなくここにある井戸の説明で、井戸の由来は奈良時代に出来たらしく内容がよく分からず早々に立ち去ったのを覚えています。

この地蔵は「壺井地蔵尊」といい、京都市中京区の西大路太子道より一本西の春日通（佐井通りともいう）と旧二条通りの交差点の東南に位置しています。そこには古い井戸と地蔵尊が祀られています。

改めてちょっと調べてみますと、まず、この井戸は奈良時代の高僧・行基が立ち寄った際に野原に湧き出る水を見つけたのが始まりだということです。井戸と一緒にある地蔵尊はこの井戸のあたりから出てきたのでそれを壺井地蔵と名付け安置されたものだそうです。井戸の前を通る旧二条通りは別名「太子道」と呼ばれるように太秦広隆寺の「太子堂」への参

詣道で、また、丹波道への主要街道で人馬などの休憩の場とされ、現在の朱雀第八小学校のプールのある場所に茶所「壺井堂」があったそうです。

江戸時代の話として、この時代罪人は市中引き回しとして六角獄舎を出発し、一条戻橋で最後の小餅を食し、壺井の井戸では「末期の水」を与えられてから西土手刑場に向かったと言われています。この西のお仕置き場（西土手刑場）は現在の旧二条通と紙屋川が交差する地点だったらしく、そうだとすれば壺井の井戸場からはすぐの処にあります。この刑場は明治維新まで罪人の斬首が行われていたと言われています。

数多の罪人が最後の「末期の水」を呑み、地藏尊に手を合わせ、あの世に向かった場所として大工棟梁のおじいちゃんの話もまんざらではなく、怨念めいた地藏尊でもあるのではないのでしょうか。

阿部会員：記

